

Title	書評：阪井裕一郎著『結婚の社会学』ちくま新書、2024年
Sub Title	
Author	吉武, 理大(Yoshitake, Rio)
Publisher	三田社会学会
Publication year	2025
Jtitle	三田社会学 (Mita journal of sociology). No.30 (2025. 7) ,p.88- 90
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	書評
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AA11358103-20250701-0088

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

書評：

阪井裕一郎著『結婚の社会学』

ちくま新書、2024年

吉武 理大

本書では、家族や結婚をめぐる変化や関連するさまざまな議論について、データや歴史、先行研究も取り上げながら、読者の「ふつうの家族」、「ふつうの結婚」という「常識」を覆す知見が数多くまとめられている。本書では、「国際比較、歴史的比較、理論」の三つの視点が重視されているとの説明がなされており、それらに基づき、各章では、一般の読者も興味をもつさまざまなトピックについて、想定される疑問にも言及しながら、丁寧なわかりやすい説明がなされている。また、事実婚や夫婦別姓、セクシュアル・マイノリティ、離婚や再婚、結婚における変化など、現代社会において関心を集める重要なテーマが扱われている。

本書の構成は、序章「『結婚』を疑う」、第1章「結婚の近代史」、第2章「結婚の現代史」、第3章「離婚と再婚」、第4章「事実婚と夫婦別姓」、第5章「セクシュアル・マイノリティと結婚」、終章「結婚の未来」となっており、各章で関連するさまざまなトピックが取り上げられている。まず、序章では、「常識」を疑う、「個人と社会の関係を問う」、「自己責任論を批判する」といった社会学の特徴について説明がなされるとともに、「障害の社会モデル」や「スタートラインの平等」などの重要な考え方が紹介されている。また、結婚をめぐる「常識」は変化しており、無子率、婚外子などについて、データの紹介や国際比較もなされている。

第1章と第2章では、明治時代以降の日本の結婚に関する歴史が概観されている。第1章では、まず、「結婚の近代史」として、見合い結婚と恋愛結婚の変化、家制度についての説明がなされるとともに、「常識」を疑う例として、「創られた伝統」としての仲人結婚と神前結婚式の例が取り上げられている。明治中期ごろまでの男女関係や結婚は、村の共同体内での若者仲間によるものであったが、その後、他の村落の者との結婚が一般化してきたことが指摘されている。また、明治期における家制度と妾、その後の戦争と優生思想の問題、国家事業としての公営の結婚相談所の存在など、明治期以降の結婚におけるデータやさまざまな記述が示されている。

次に、2章では、戦後の日本における家族について、「家族の戦後体制」の説明がなされるとともに、結婚におけるさまざまな変化として、従来の地縁結婚から職縁結婚への変化、職縁結婚の機能の衰退と結婚の個人化、仲人の変化、結婚観や結婚適齢期の変化、皆婚社会の終焉、デジタル社会におけるマッチングアプリでの出会いとそれが及ぼす影響などが取り上げられている。現代社会における社会的孤立の問題とデジタル機能が多様なニーズや社会関係を構築する可能性が指摘されている点は興味深い。さらに、国際比較とともに、日本の家族主義やケア労働におけるジェンダー規範といった

問題も指摘されている。

第3章では、離婚の歴史的な変遷、離婚やひとり親世帯をめぐるジェンダーと貧困の問題、再婚の増加とステップファミリーの困難について取り上げられており、初婚継続家族を前提とした現代日本の制度上の問題や社会における困難が指摘されている。

第4章では、同棲や事実婚と夫婦別姓が扱われている。まず、欧米における同棲の普及のプロセスは、同棲が結婚制度への抵抗として位置づけられる段階、同棲から結婚へというライフコースが標準化される段階、結婚の代替または結婚とほとんど区別できないものとして同棲が受容される段階として説明されることが多いとされる。また、ベック-ゲルンズハイムによると、流動的な社会のなかで、若者の自身や社会状況に対するリスク意識が高まり、結婚を忌避し同棲のような緩やかな関係性を選択するようになったことが指摘されている。

他方で、日本では状況は異なり、結婚外で同居するカップルは少ないが、事実婚の人々の意識における多様性が指摘されている。また、歴史的にみると、日本では戦前には家制度により内縁が多かったが、家制度を批判する立場から問題視されるようになり、その後、事実婚は夫婦別姓の議論により再び注目され、自発的に事実婚を選択する人々も存在することが認知されるようになったという説明がなされている。日本の事実婚の特殊性として、「夫婦別姓」のために事実婚を選ぶケースも多く、人々の価値観や関係性の変化に法律が対応していないことによって生じている側面も大きいということが指摘されている。

また、本章では、夫婦の姓をめぐる歴史についての説明がなされるとともに、著者による『事実婚と夫婦別姓の社会学（改訂新版）』をもとに、夫婦別姓をめぐる議論の対立が整理されている。夫婦同姓は「日本の伝統」なのか、「子どもがかわいそう」なのか、「旧姓の通称使用で事足りる」のかといった、夫婦別姓の議論に対して想定される批判も取り上げられており、それに対するさらなる議論や論点が提示されている点も、一般の読者にとってもわかりやすいものとなっている。

さらに、本章の事実婚や夫婦別姓に関する内容は、著者の専門とするテーマであり、詳しい内容が取り上げられており、調査による事例も紹介されているため、大変興味深い。実際の語りから、生まれもった姓を変えないという希望をもった二人が結婚をする際に、それが認められない法律があるからこそ事実婚となっているケースがあり、事実婚の当事者がどのような意識をもっているのかということが見えてくる。また、夫婦別姓の問題の潜在的な当事者には、「夫婦別姓」ではなく、「妻の姓」を選択した法律婚の夫婦の事例もあり、妻の姓を選択する際にも、親や周囲からの理解を得ることの難しさが生じていることがわかる。

5章では、セクシュアル・マイノリティをめぐる基本概念、二元論の問題、異性愛主義の社会であることの問題について説明がなされるとともに、各国のセクシュアル・マイノリティをめぐる歴史や社会運動、同性婚の法制化やパートナーシップの制度についての議論が整理されている。さらに、本章では、セクシュアル・マイノリティや同性婚をめぐる議論における多様な側面にも言及されており、「最小の結婚」の議論も紹介されている。また、本章においても、実際の調査における当事者の語りが紹介されており、セクシュアル・マイノリティの当事者が子どもの頃に抱えていた孤独感やカミングアウトの経験からは、周囲や社会の承認が重要であることが見えてくる。終章では、マーサ・A・ファインマンやエリザベス・ブレイクなどの重要な議論が紹介されるとともに、住宅のあり方にみえ

る家族規範やジェンダー規範、新たな居住の形、多様なニーズによるつながりなども示されている。

以上のように、本書では、結婚や家族をめぐる歴史や変化、現代社会におけるさまざまな議論や問題が取り上げられており、結婚や家族に関して人々がもつ枠組みや「常識」を疑う重要性が示されている。本書を通して、さまざまな結婚や家族をめぐる国際比較や歴史的な理解、理論的な整理が可能となっており、データや先行研究の記述、事例などから、人々が「ふつうの家族」や「ふつうの結婚」と考えてしまっている枠組みを見直すことができるのではないだろうか。各章で扱われている内容は、現代社会における多様な結婚や家族を考えていくうえで重要な問題であり、一般の読者の関心も高いと考えられる。

さらに、事実婚のカップル、妻の姓を選択した夫婦、セクシュアル・マイノリティの当事者など、著者自身による質的な調査の事例が紹介されている点も本書の特長である。実際の当事者の語りからは、人々の意識や実情が見えてくる。事例にみられるように、妻の姓を選択して法律婚をしており、事実婚ではないという場合にも、夫婦別姓の問題の潜在的な当事者となりうることに加え、妻の姓を選択するということが可能であった場合にも、それで問題が解決するわけではなく、社会における規範意識により周囲から理解を得ることの難しさや関係性における困難が生じうことは重要な点であると考えられる。このような側面においても、本書では、現代社会の家族や結婚をめぐる問題について、質的な事例から、その実態や複雑さが明らかになっている。そのような意味では、その他の章で取り上げられていた、子どもがいない者や未婚者、離婚やひとり親世帯、ステップファミリーなどの議論においても、何らかの事例への言及が可能であれば、一般の読者にとっても、その実態が伝わりやすく、より具体的に考えることができるのではないだろうか。また、本書では、さまざまなテーマが扱われており、3章では、日本における養子縁組による後継ぎについての言及もなされている。この点についてより詳しい先行研究やデータの紹介が可能であれば、さらに興味深いのではないかと考えられる。

最後に、本書には「読書案内」として、各章の内容に関連する文献について、「さらに学びを深めたい方への文献リスト」がまとめられている。入門書や新書から重要な先行研究まで幅広く紹介されており、読者が本書を読んだ後にさらに興味をもった内容について他の文献も読むという際にも参考になるだろう。本書は、家族や結婚、事実婚や夫婦別姓などの各トピックに関心がある一般の読者や学生だけでなく、社会学を学ぶ学生や他分野の研究者、家族社会学の分野の研究者をはじめとした、家族に関連した授業や講演の機会がある研究者にもお勧めしたい一冊である。

(よしたけ りお 山口大学人文学部)